

# 論考2016

上田 紀行

私たち人間は未来を構築しながら生きていく存在である。より良い未来を築くためには、現在生きている問題を直視しなければならぬ。本論考も現在進行形の問題を取り上げつつ、未来志向で進めていきたい。

## 信用の失墜

最初に取り上げたいのは、昨年から続いた数々の「立派な不正」の信用失墜である。10月に発売した横浜市のマンション傾斜問題では、検査データの改ざんなどにより一部の人が必要な検査に達していなかった。元請けは三井住友建設、1次下請けが日立ハイテクノロジス、2次下請けで美際(株)を打ったのが旭化成建材。いずれも信頼を集めてきた「立派なブランド」を冠した会社である。当初、担当者の不正とされたこの事件は、組織的だったことが明らかになっていった。

東電が6年で計1500億円以上の利益を水増ししていたという不正会計事件にもかかわらず、これまでに

## 価値の転換と人間の尊厳

だがフォルクスワーゲン(VW)の不正を見れば、日本だけの問題ではないと分かる。

06年に決められたという。リーマン・ショック前の米国バブルの時期に世界はマーケティング至上主義に転換していった。いいものを売れば売れるから「売れる物がいいのだ」。立派な会社は評価を得るから「評価を得る会社は立派な会社だ」という価値の転換だ。

私たちの人間観も同じだ。最近の学生は明らかに評価に敏感になった。課題を出すと「評価のポイントは何ですか」と必ず聞いてくる学生が多い。入試科目以外はまったく勉強してこない学生も少なくない。無駄なことばかりをやらねばならない効率の良いかもしない。しかしやがてその先にある空虚に悩まされることになるだろう。

「たまたまのりゆき」1958年東京都生まれ。愛媛大助教授を経て、東京工業大リハラルアーツセンター教授。専攻は文化人類学。人間の生き方や社会システムの在り方について幅広く提言。生きている意味「タライ」の対話「人間ライオン」など著書多数。



(東京工業大教授) 上田 紀行

## マーケティングが覆う世界



記者会見を終え、一礼する田中久雄社長(当時)の手前から入る。東電幹部は2015年7月、東京都港区

「たまたまのりゆき」1958年東京都生まれ。愛媛大助教授を経て、東京工業大リハラルアーツセンター教授。専攻は文化人類学。人間の生き方や社会システムの在り方について幅広く提言。生きている意味「タライ」の対話「人間ライオン」など著書多数。

## 独自の抽象 変遷を示す

高知市出身の洋画家、吉見博の個展が高岡郡中土佐町久礼の中土佐町立美術館で開催されている。1990年代の代表作を中心に33点を展示している。17日まで(12日は休館)。

の画業を振り返る構成だ。この吉見は制作拠点を高知市に移し、併せて春から絵画教室も始める予定という。自身の作品をあらためて広く知ってもらおうと企画した。

最高貴に輝いた作品。人物の顔のパーツや体のラインを重ね合わせ再構成した。シート(麻布)を画布に使用し、なかからつた雰囲気を添えていった。

「母子」黄色をベースに描かれた油彩。子を抱く母の存在がしわじわと伝わってくる。不思議と大きく見える画だ。

69年の作品「ふたり」。電車が乗っている人を描写した具象画。全体としては抑制された画調だ。それでも多彩な色を調和させる筆遣いは、現在とあまり変わらないうちに思える。

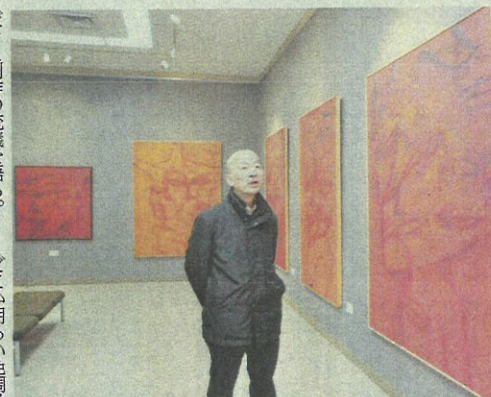
## 下絵重ねにしむ温かみ

が、画風の変遷が見取れる興味を引く。具象から抽象へ。たとえ抽象でも描く人物や風景の形は柔らかなタッチで残す。赤をベースにした90年代の大作の数々は印象に残った。

車に乗っている人を描写した具象画。全体としては抑制された画調だ。それでも多彩な色を調和させる筆遣いは、現在とあまり変わらないうちに思える。

「アジアから来た鳩女」。2004年の自由美術展で

「根拠的な生命力に興味がある。作品として伝われば」と語る吉見博(中土佐町立美術館)



「根拠的な生命力に興味がある。作品として伝われば」と語る吉見博(中土佐町立美術館)

だ。創作の流儀を語る。自分のイメージを又もいるかのようにとりこんで下絵を重ね、シンプルで温かみを感じる独自の作品にしていく。

(西森征司)

- 文化 消息
- 南国市の国吉や「芸文京展」2016
- 京都市による美術公
- 「芸文京展」2016
- 【一席】 香美 牛小屋を壊す神
- 【二席】 須崎 枝打ちも絵で終
- 【三席】 香美 かなはりに車橋
- 【一席】 香美 「鬼太郎」連れ
- 【二席】 香美 「短日の陸軍の中
- 【三席】 高知 淡柿が変身する
- 【一席】 土佐 脱藩の龍馬の道
- 【二席】 高知 爆撃も銃撃もな
- 【三席】 黒潮 北風に吹かれて
- 【一席】 十
- 【二席】 高
- 【三席】 安

高知市出身の洋画家、吉見博の個展が高岡郡中土佐町久礼の中土佐町立美術館で開催されている。1990年代の代表作を中心に33点を展示している。17日まで(12日は休館)。

の画業を振り返る構成だ。この吉見は制作拠点を高知市に移し、併せて春から絵画教室も始める予定という。自身の作品をあらためて広く知ってもらおうと企画した。

最高貴に輝いた作品。人物の顔のパーツや体のラインを重ね合わせ再構成した。シート(麻布)を画布に使用し、なかからつた雰囲気を添えていった。

69年の作品「ふたり」。電車が乗っている人を描写した具象画。全体としては抑制された画調だ。それでも多彩な色を調和させる筆遣いは、現在とあまり変わらないうちに思える。

「下絵重ねにしむ温かみ」が、創作の流儀を語る。自分のイメージを又もいるかのようにとりこんで下絵を重ね、シンプルで温かみを感じる独自の作品にしていく。



# 論考

## 2016 上田紀行

SMAPが解散か、というニュースを聞いたとき、あまりの寝首に水のごとに驚かされた。しかし本当の驚きはその後待っていた。

まずはその人気である。

「SMAPのいない生活なんて考えられない」と知り合いの20代の女性は叫んだ。物心ついたときから彼女はSMAPとともにあった。テレビをみればいつでもSMAPがいて、彼女はSMAPとともに成長し、人生の一部となってしまっている。SMAPが解散してしまえば自分の人生がなくなってしまうようなものなのだ。

同じような発言はネット上にもあふれた。SMAPの存在はここまで大きいのか！私ばかりのため驚愕した。

店頭に並べられたテレビに映し出された「SMAP」のメンバー（1月18日、東京・新宿のLAB I 新宿東口館）



# 「自由に生きる」は幻か

思わせてしまう。SMAPと一緒に人生を歩んでいるというお洒落での空海お大師さんのごとき存在感は、一握りの大スターたちだけが持っている輝きだろう。

広がった失望感  
しかし第二の驚きは、その「国民的スター」が一介の会社員、そして、使用人だったと気づいたのだ。あの無残な謝罪会見は何だ

ったのか。私たちは使用人の分際であるにもかかわらず、このなほは独立するなどという大それた事をしかせうとしてしまい、多くの方々に迷惑をおかけしました。これだけの大スターであつても自由に行動するこ

「SMAPも自分たちの自由で何でもできる」と思いついてたんだよね」「会社員なら自分の立場をわきまえて行動しなよ」「はいけな

も「自由」に驚かされたのは「SMAPも自分たちの自由で何でもできる」と思いついてたんだよね」「会社員なら自分の立場をわきまえて行動しなよ」「はいけな

## 公開謝罪が映す社会

さらに驚かされたのは「SMAPも自分たちの自由で何でもできる」と思いついてたんだよね」「会社員なら自分の立場をわきまえて行動しなよ」「はいけな

今回の場合は会社が典型的なオナー企業で、創業者一族の意向が強く、その中でSMAPを育てたマネージャーの確執があり、グループを解散しては商品価値が激減してしまうという事情もある。きわめて特殊な事例だった。

かたや年収数億とも言われるスターの不自由さ、そして過酷な労働条件で酷使される労働者の限界的状況。それは私たちの社会が今こそ「誰も自由に生きられる」という課題を真正面から取り組むべきだということを強く示唆している。(東京工業大学教授) ◆随時掲載します

## 対話で知る東アジア史

日本、中国、韓国、台湾。それぞれ国・地域を代表し、計16人のアーティストが参加した「ふぞろいなハーモニー」展が、広島市南区の市現代美術館で開催されている。東アジアの歴史と文化をめぐる対話という、高い志を掲げた展覧会だ。

日中韓台の16人が参加

### 広島「ふぞろいなハーモニー」展

台湾の陳界仁が作品化したのは、冷戦期の秘史ともいえる「四方公司」をめぐる記憶と記録だ。1995年、米中央情報局(CIA)が台湾に設立した会社。共産党が政権を握った中国本土に奇襲をかけるための「反共救国軍」の養成を担ったという。



韓国の伝統劇俳優の人生を映像と写真で作品化したサイレン・ウニョン・ジョン「私は歌わない」。俳優本人によるライブパフォーマンスもあった。

日本梓では千葉正也、田中功起、高橋裕、米田知子が参加。米田の写真作品は、平和記念式典並みの広島の空気を鮮やかに捉える。政治的判断で美術品の出展がかなわず、説明文が想像するしかない中国人作家劉鼎の「作品」もある。

# 文化

アルジェリアで通訳をする仕事の採用試験を受けるため、パリから一時帰国のもついでに戻ったのが1976年。

宮田 卓爾

筆記試験の後、フランス語で面接があり、ネーティブの試験官に交じって見覚えのある顔があった。大学の2年先輩の男性で、当時テレビのフランス語講座の講師をしていた。その彼が面接の途中、私の単語力に問題があることを指摘した。試験はパスしなかった。

緑地帯

パリに荷物は友人の一人に頼んで処分してもらった。1カ月して、パリで知り合った暮らフの師範であるリムさんから小包が届いた。私が何の連絡もしていないパリを離れたことに立腹している言の手紙と一緒に、リムさんが著した本が入っていた。巻末のアンペンティックスに、書

### 私の移動祝祭日 ⑧

「移動祝祭日」は、今でも少し苦い味がある。(詩人) 広島市 二おわり











月、水、金、土曜日 掲載

文化生活部

bunka@kumanichi.co.jp  
TEL:096-361-3181 FAX:096-361-3290

文化 | Culture

論考 2016

東京工業大学教授 上田 紀行

公式確認から60年の水俣病

日本の未来指し示す存在

水俣病が公式確認されてから5月1日で60年を迎えた。多くの日本人にとって水俣病は高度経済成長期に起きた過去の公害と捉えられているかもしれない。しかし水俣病は現在進行形の問いとしてある。患者を巡る問題が解決していないという意味において、そして水俣病を生んだ構造を日本社会が脱しているのかという意味においてである。

現在進行形

水俣病の認定患者は3月末現在、熊本・鹿児島両県で2280人にすぎない。多くの認定申請が却下される中で、政府は1995年、2010年と2度にわたって被害者に一時金と医療費補助等を支給する政治決着を図り、5万人近くが応じたが、今なお認定申請者は2千人を超え、損害賠償を求める訴訟も継続している。60年時を経ながらも、なぜ水俣病は解決しないのだろうか。

私は昨秋水俣に数日間滞在し多くの人たちと語り合う機会を持ったが、それは水俣病がまだ生きた問題であることを感じさせる瞬間の連続だった。まず水俣でチソンという会社

と医療補助を受け取っていたという屈折がそこにはある。水俣におけるチソンの存在は、原発を巡る状況にも限りなく近い。都会のエリートたちの国業会社によって地方に誇りと繁栄がもたらされる。それは幸せな関係だ。ただし事故が起こって破滅的な状況に転化するまでの話だ。その意味で水俣が今後どのような現在進行形を生きていくのかは、日本社会の今後を指し示すものでもあるのだ。

「苦海浄土」

私が水俣に行つて初めて気づいたことがある。全国から水俣に引き寄せられた多くの若者がいたという話だ。彼らは定住し、おじいちゃんおばあちゃんにも患者さんや状況に寄り添い、熱い志をもって力強く水俣を発信している。作家石牟礼道子氏や医師原田正純氏に感化されて仕事を辞めて水俣に来てしまった。全国を引っかかっていたら水俣に引っかかってしまった。さまざまな若者が、国策企業の城下町水俣の雇用に引かれてははな、苦しむと葛藤の現場に立ちたいと、あるいはその中でもふんわりと人間を受け止める水俣の奥深くに引き寄せられて集まってきた。彼ら「元」若者の成熟した中年パワー、そして患者さんや水俣病の「語り部」たちに接し、私はまさにそこに「苦海浄土」、苦みみの故の希望を見た。



水俣病の公式確認から60年を迎え、熊本県水俣市の「乙女塚」で開かれた慰霊祭で黙とうする参加者＝5月1日

胎児性水俣病の患者さんたちと会った。私の中では高校生時代にユージン・スミス氏の写真や土木院監督の映画で見た子どもたちの姿のまま時が止まっていたが、彼らはもう遺骨を迎えたいおじいさん、おばあさんになっていた。彼らの人生の物語、親への愛情、親族との葛藤、チソンへの愛憎、病の悪化、不安、希望を馳せながら、ひどくくりにされた患者ではなくなってきた一人一人の人間なのだ深く気づかされた。

葛藤と屈折

しかしその患者、被害者を巡る状況は大きな葛藤と屈折を持たれるという絶望的な状況に置かれる。そしてチソンへの異議申し立ては「自殺」ともいっべき激烈さを伴わざるをえなかった。

最近中学生の娘から「同級生の誰々ちゃんのお姉ちゃんはチソンマンと結婚するんだって。すごいね。これで一生安泰だね」と言われたと苦笑していた。チソンと歩むもの、水俣のイメージを損なうものとしての水俣病。いまだに、患者はなるたけひっそりと隠れていてほしいと望む人々もいる。最近患者が認定された際に、「また水俣病の水俣だ」と思われちゃうじゃないか」と苦々しく語った男性は、実は自身も被害者として一時金

＝月一回掲載

最古の技法で切り取る社会

写真家の新井卓さんが写真集「MONUMENTS」(PGI)で、写真家の登壇とされる木村伊兵衛賞を受賞した。「現代美術の文脈でいつているつもりだったので、写真の質に決まっていた」と語る通り、現代の写真技術とはかけ離れた手法で、社会を切り取っている。

写真家・新井卓さん



「切つて」と切つてくぬる美言葉の魅力を、ダゲレオタイプ(写眞)と語る新井卓さん(東京都新宿区)

がきっかけ。「人が生まれたまま閉じ込められているよかったです」

時間もコストもかかるので、1日に一枚しか撮れず、複製もできない。そんなダゲレオタイプにこだわりの

物質におびえながら撮影したのは、ヤマユリの花や街をさまよつた、漁師たちのボートレド。分りやすい被災地のイメージを避けたのは「東京と福島の日常をつなげたかったから」だ。「なぜこんな状況が生まれてしまったのか」。福島で感じた素朴な、しかし切実な疑問への答えを求めて、人類が初めての核実験を成功させた米国のミサイル実験場や、広島、長崎へも足を運んだ。

フランス風化粧品を回顧 東京で「パピリオ」展

水の瓶など、約120点の資料で明治期からの歴史を回顧する。発起人でビューティサイエンス学



文化

論考2016

上田 紀行

オバマ米大統領の広島訪問は感動的な出来事だった。原爆投下からまもなく71年、あまりに長い年月が経過したが、巨大な暴力を行使した国の大統領がその地を訪れることなどあり得ないと思われてきた70年間でもあったことを踏まえ、まさに歴史的な瞬間だった。

基地問題の現実

そして犠牲者に哀悼の意を表し、平和への、核廃絶への深い思いを表出した演説が、はたして現実的な方策を伴っているのかといった批判はあってもせよ、被爆地広島でなされた意味は大きく、それは単なる演説として聞かれるべきものではない。人類の歴史において多兵器という大量破壊兵器が市民の殺りくのため初めて使用され、10万人以上が犠牲になったこの地で発せられた演説として大きな意味を持つ。

しかしその約1週間前に米軍属委員を務め、展示内容の策定に携わった。ある雑誌に「戦争の害事件によって、私たちに複雑な思いを生じさせた。事件は米軍による原爆投下から70年たち、広島ではやっと歴史が、一歩前進したが、沖縄の米軍基地問題は、今も続いている」という現実を突きつけるだけだ。二つの地へ起きた悲劇の関わりを、互いに争い、全然平和じゃないのだろっか」と問いかけた。なんに万雷の拍手を浴び、沖縄戦について素人同然の30代半ばの若者が委員に任命されてしまったのだ。

オバマ氏の広島訪問

沖縄の悲劇と深い関わり

20年以上前、私は沖縄戦終結地の摩文仁の丘に立つ沖縄県平和祈念資料館の移転改築の検討

かっただけだった。米軍との本土決戦を生き延びたばかりの若者たちに、県民にも安全な戦争まで戦い「捨て石」作戦が実行され、約60万人の県民のうち10万人以上が亡くなった。

の最後は、悲劇の舞台でありながら美しく広がる海を見渡す全面ガラス張りのお館に出て、来館者は自己対話する」という私たちのプランは現在の建築に



④広島市の平和記念公園での演説で「核兵器廃絶を世界への決意を表明するオバマ米大統領(5月24日) ⑤米軍属が逮捕された事件を受け、沖縄県の米軍属手続基地前でメッセージを掲げ抗議する県民(5月20日)



「私が進んでいくことができる未来には、広島で長崎は核戦争の夜明けとしてではなく、道徳的な自覚の始まりとして知られる」といってオバマ大統領の演説の結句は、まさに他者を加害者にしたための努力、そして暴力に合理的な理由を与えなごうという強い自覚から生まれたのだらう。そのことが今も世界の各地で、そして沖縄をめぐって問われているのである。

アートとともに

―道内中堅作家9人展から

ここ数年「雨」をモチーフにした作品が、大気から水の滴が重力によって落下するだけの現象に自分でも思

高野 理栄子 (39) 川柳 版画

無意識が作り上げる「雨」

たかのりえこ 1970年小樽市生まれ。札幌芸術大芸術科・専攻科(当時)美術専攻卒業、同大研究所修了。コラージュ版画のほか、モノタイプ、銅版画も手



持。北海道版画協会会員、道展会員、画会連合会員。

風土が私の体の中に土着性として含まれていくように感じている。無意識の状態での性質が映し出された版画として紙に写し取られている。そう考えると、その意識的な愛すべき体験をしていくと、思いつく。私はこの地を明確なイメージによって表現しようとは思っていない

い。最初からイメージやメッセージを排除して取り組んでみる。ルールは、天の地を決め「雨」を描くことだけ。つまり、偶然や無意識による性質が作品を作り上げる動力となっている。この予測不可能な動力は今の作品を手描き、続けるつもり

「Amie」2014年 作家蔵





# 関わり合う二つの犠牲

オバマ大統領の広島訪問は感動的な出来事だった。原爆投下から71年、あまりに長い年月が経過したが、巨大な暴力行使した国の大統領がその地を訪れたことなどあり得ないと思われてきた70年間でもあったことを思えば、まさに歴史的な瞬間だった。

## 【前進と継続】

そして犠牲者に哀悼の意を表し、平和への、核廃絶への深い思いを表出した演説が、はたして現実的な方策を伴っているのかといった批判はあるにせよ、被爆地広島でなされた意味は大きく、それは単なる言論として聞かれるべきものではない。人類の歴史において核兵器という大量破壊兵器が市民の殺りくのために初めて使用され、10万人以上が犠牲になったこの地で発せられた言説として大きな意味を持つ。

加害被害の立場を超えて、痛ましい歴史の出来事とともに追悼し、未来志向で平和を築こうという大統領のメッセージは、しかしその約1週間前に米軍属が逮捕された沖縄の女性暴行殺害事件によって、私たちに複雑な思いを生じさせた。事件は「米軍による原爆投下から70年たち広島ではやっと歴史が、一歩前進したが、沖縄の米軍基地問題

## オバマ氏広島訪問と沖縄

### 論考2016

上田 紀行

は今も続いている」という現実を突きつけるだけであく、二つの地で起きた悲劇の関わりを深さをいま一度

思い起こさせるものでもあった。

## 【自己と対話】

20年以上前、私は沖縄戦終結地の摩文仁の丘に立つ沖縄県平和祈念資料館の移転内容の検討委員を務めた。ある雑誌に「戦争の展示だけではなく、そこから実際に平和が生まれるような平和博物館を作るのが夢だ」と書いたのが発端だ。それが沖縄県庁の目にとまり依頼された。慰霊の日」の記念講演で「なぜ平和運動をしている人たちは常に互いに争い、全然平和じゃないのだろうか」と問いかけたとたんに万雷の拍手を浴び、沖縄戦について素人

同然の30代半ばの若者が委員に任命されてしまったのだ。

## 【努力と自覚】

広島も沖縄の犠牲も米軍が加害者であることは間違いない。だが日本も、米軍をこれだけ多くの犠牲を生みだす加害者としていないための方策を戦争末期であつても講じられた。戦争や暴力の抑止とは、他者を加害者にならないための努力でもある。

一方で多くの米国人は原爆の投下で「卑劣な」真珠湾攻撃の報いであり、戦争を早く終結させ犠牲者を最小化するための作戦だったと言っている。しかし実際にはソ連参戦による戦後日本への影響力の減少を恐れての外交的作戦でもあった。

## 歴史動くも現実突きつけ



広島市の平和記念公園での演説で「核兵器なき世界」への決意を表明するオバマ大統領  
=5月27日

構想はその後大幅に縮小され、展示をめぐっても追いつめられた人々が避難したガマ(壕)の再現展示で、県が一方的に、住民を威嚇する日本兵の手から銃を外そうとし、最終的に元に戻すなどさまざまな問題が生じたが、「悲惨な戦争展示の最後は、悲劇の舞台でありながら美しく広がる海を見渡す全面ガラス張りの回廊に出て、来館者は自己と対話する」という私たちのプランは現在の建築に残されている。

## 【随時掲載します】

「私が選ぶことができる未来には」広島と長崎は核戦争の夜明けとしてではなく、道徳的な自覚の始まりとして知られるだろう」というオバマ大統領の演説の結尾は、まさに他者を加害者にならないための努力、そして暴力に合理的な理由を与えないという強い自覚から生まれたのだろ。そのことが今も世界の各地で、そして沖縄をめぐる問われているのである。(東京工業大学教授)

## 文化

誰にも似ていない自分を堂々と表現する。これが信条だ。感受性も価値観も人それぞれ、型を押しつける世間には徹底抗戦です。ライター「林永子さん」は、攻撃的なエッセーを集めた初の著書「女の解体」(サイゾー)に結婚や出産を忌避し、自由を愛する思いのたけをぶちまけた。複雑なエネルギーが渦巻く東京日々保で育った。ホテルや風



ライター

林 永子さん

## 旬英気鋭

## 反発恐れず自分語る

「自意識過剰とちやかされませんが、自意識をきちんと語るのことは大事なこと」と言う林永子さん  
=東京・汐留の共同通信社

俗店が並び、路上で客を引く女性も、外国人が集住し、右翼の街宣も日常茶飯だ。性暴力、差別と貧困が普通にこちやっこある街で複雑な大人の事情に融れ人生いろいろ、職業にも出自にも貴賤はないと気づいた。美術大学で映像文化を学び、映像批評などを執筆してきた。2年分のウェブ連載を全面改稿した新著は、「超個人的シチュエーション」を掲げた新境地だ。女性の多様な生き方を認めず、「産む性」としか見ない男性の無理解に憤り、「母になる幸せ」を無神経に口にする女性にも苦言を呈した。

反発を恐れず自分を押し出す

す、「おどこ気」あふれる語り口が身の上だ。連載中から「自意識過剰」などと批判も受けたそうだが、「主語を明確に『私はこう思う』と語るのことは大事なこと。反感を覚えた読者が『自分なりの正解』を見つけてくれたら本望です。共感が欲しいわけじゃない」ときっぱり。やはり男前だ。

とはいえ執筆を通じ、強い言葉と態度で抑圧していた弱い自分も見えてきたという。「例えば男女平等を叫びつつ、内心では男らしくありたい自分がいる。男に頼るなど言いながら、男に甘えたくもある。矛盾だらけの自分をどう受け入れ、人生の後半戦に向かえばいいのか。今はかなり心とない気分ですが、そんな試行錯誤から次の執筆テーマが浮かぶのかも」



# 論考

## 2016

上田 紀行

### Bangladesh のテロ 脱宗教化と過激思想傾斜の逆説

# 暴力に「報復」しない意志を



ハンガリー、ブダペストの警察官。ロ・タッカ共同

多くが富裕層出身だったことだ。与党や外資系企業の幹部の息子で、エリート高校の同級生やマレーシアの大学に留学した者もいる。

なれば、彼らはテロリストになるのだろうか。「エリート校の学生たちはイスラム教の宗教教育を受けていないから」とのタッカ市民のコメントがあった。実行犯の父の外資系企業幹部も自身が信仰熱心ではないことを認めている。英語教育のエリート高校では、伝統的な宗教教育を受けていない若者は過激思想で

免疫がな「異教徒に対する聖戦」といった攻撃的解釈にやすやすと洗脳されてしまう。

オウム真理教事件もそうだった。高学歴の若者たちが日帝世界から姿を消してカルトに身を投じてテロを起す。オウムの若者たちが発した「寺は単なる風景だった」という言葉が忘れたい。人生の意味を求めた若者の葛藤に、伝統的仏教教育

若者たちも同じだ。現代におけるテロリズムとは伝統的復興ではない。グローバル化の影響で共同体の絆が弱まり、脱宗教化の中で、個人がネットに吸引され洗脳されていく、極めて現代的な状況が生み出す暴力なのである。

の言葉はまったく聞いていなかった。それゆえ若者たちは「マ」の「マ」を指して失脚しているが、それはインターネットの影響も大きい。家族と共同体のガードを崩壊して、一人一人の若者はネットに捕捉されていく。ハンガリー、ブダペストの警察官。ロ・タッカ共同

その上で「国民総生産」にならなくて、「世界総暴力量」の大きな指標を考えた。この地球上で「総暴力量」が増大すれば、それは必ずしも私たちが及んでいく。テロに対処していく、世界の総暴力量を減らしていくことを常に意識しないといけない。それは「報復」を決してしないという強い意志であり、それを支える健全な宗教意識の再構築である。世界の暴力量を減らし、幸福を増やしていくには、必ずしも私たちが及んでいく。テロに対処していく、世界の総暴力量を減らしていくことを常に意識しないといけない。それは「報復」を決してしないという強い意志であり、それを支える健全な宗教意識の再構築である。世界の暴力量を減らし、幸福を増やしていくには、必ずしも私たちが及んでいく。

作者の金子常光は、鳥瞰図を専門とする画家。当初、この分野の先駆者存在した吉田初三郎の工房に属したが、23年に独立して「日本を所図発刊」の創立に参加した。以後、各地の観光図を手がけ、吉田で人気を二分した。長野県関係の作品も多い。

なお、本作の描写には、後年の金子作品に特有の、緻密な山肌の描写や淡めの色使いが感じられず、より明らかな色彩や単純化した形態に特徴がある。こうした点からも、大正時代後半の制作と判断されるのである。

タッカは今よりも比較的安全な都市であった。しかしテロは今や世界のどこでも起りうる。実際パリでも、米フロリダ州でも大規模なテロが起きた。4年後に五輪を控える私たちが日本人も、対岸の問題としてではなく、自分の事としてテロを考える時期に来ている。

今回驚かされたのは実行犯の

## しなの 歴史再見

県立歴史館総合情報課学芸員

林 誠

### 草津軽便鉄道沿線鳥瞰図

## 鉄道で結ばれた証しを今に



金子常光「草津軽便鉄道沿線鳥瞰図」(部分) 大正時代、絹本着色、59.6×217.0cm(草軽交通株式会社蔵)

軽井沢と草津温泉。いずれもわが国を代表する避暑地・観光地だが、この間が昭和30年代半ばまで鉄道で結ばれていたことを「存じなさいか。その歴史は意外に古く、全通したのは1926(大正15)年のことであった。今回紹介する作品は、この区間を運行していた鉄道会社が制作したパンフレットの「原画」である。

作品は全幅2段に及ぶ長大な巻子で、掲載図版は左側約半分

の1の部分図である。浅間山をはじめ吾妻山、白根山などの山々に加え、軽井沢、草津温泉など上信国境に跨るおなじみの観光地が色鮮やかに描かれている。

一方、軽井沢と草津の間には列車が白煙を上げて走っているが、いま電化ははたされてい

点線となり、かつての未開通の道。

実はここに描かれているのは、「草津軽便鉄道」(後の草津電気鉄道)の開通当初の姿である。同線は、15年の新軽井沢・小瀬間を皮切りに延伸し、26年には新軽井沢―草津温泉間55.5kmが全通している。両駅間は、片道75分時間を要していた。

制作年は不明だが、推定する手掛かりは作品の中にある。例えば、本作に描かれている軽井沢―草津間は、19年に開業し、24年に電化、同年には「草津電気鉄道」と社名を変更していること、「地蔵川」(27年に北軽井沢と改称)等の駅名、画中では未開通の編組―草津温泉間の全通が26年であること等である。そして、本作をもとにしたパンフレットが23年に発行されていることから、19〜23年の制作と

考えられる。

作者の金子常光は、鳥瞰図を専門とする画家。当初、この分野の先駆者存在した吉田初三郎の工房に属したが、23年に独立して「日本を所図発刊」の創立に参加した。以後、各地の観光図を手がけ、吉田で人気を二分した。長野県関係の作品も多い。

なお、本作の描写には、後年の金子作品に特有の、緻密な山肌の描写や淡めの色使いが感じられず、より明らかな色彩や単純化した形態に特徴がある。こうした点からも、大正時代後半の制作と判断されるのである。

◆ ◆ ◆

本作品は、県立歴史館 千曲市 10月28日開催中の企画展「夢のせせがれ州の鉄道」で展示されている。問い合わせは同館総合情報課(0269・274・009)へ。



# 可視化される「つながり」

上田 紀行

7月20日の午後、勤務先  
の大学のキャンパスで気味  
の悪い風景が広がって  
いた。

ふだんは単なる通り道で  
しかない広場に多くの人が  
つぎつぎと歩いている。何かの集  
会が行われているわけでも  
ない、誰かが演説をしている  
わけでもない。

## 論考2016 「ポケモンGO」の風景

しかし学生たちは何かに  
吸い寄せられるように集ま  
っていた。そしてキョロキ  
ョロしながら歩き回り、明  
らかに挙動不審だった。私  
の目には見えない、しかし  
彼の目には見えるものが  
そこにはいて、彼を操って  
いる。「どこから来よう  
出したソンのよした」と  
同僚がつぶやいた。それが  
スマートフォン向けゲーム  
「ポケモンGO」のサー  
ビス開始日の風景だ  
った。

不気味な記憶  
その光景を見て、私は約

20年前の不気味な記憶を思  
い起して、大学の会  
議がその日は何か妙だっ  
た。何かがある…。テー  
ブルを囲んだ十数人の教員以  
外の何かがその部屋に  
ような気がして落ち着かな

### 今こそ鋭敏な感覚持つべき



スマートフォンの画面に現れた「ポケモンGO」のピカチュウ＝東京都港区

かった。

そこに「いた」のは「た  
まごうち」だった。2人の  
教員がエッセーを書くため  
に発売直後の携帯ゲームた  
まごうちを雑誌編集者に持  
たされていったのだ。彼ら  
は会議で発言しながらも、机  
の下でエサやりなどの世話を  
続けていた。

一緒にいながら、意識は  
別のものに奪われている。  
それは私たちの心にさわか  
わとした不安を与える。自  
分と親しい人であればなお  
さらだ。他のことに奪われ  
た恋人が、気もそらさず生  
返事になって、不安になり  
ない人はいない。

もちろんつまらない会議  
の最中に別のことを夢想し  
ているというところはそれま  
でもまああったことだが、  
それがこの時、たまごうち  
という明確な対象物になっ

ただ。

奇妙な空間

それから20年、携帯電話  
やスマホとの共生による  
「どこにいながら他のもの  
とつながっている」という  
感覚はもはや当たり前にな  
った。私は講義の際にスマ  
ホやパソコンの使用を禁止  
しているが、黙認している  
教員や、むしろ奨励してい  
る教員もいて、そこでは学  
生は講義中でもツイッター  
でつぶやき、メールやLINE  
（ライン）で教室外の  
人と会話している。

目の前の知人が私と会話  
しながら平気でスマホをい  
じる。電車の中のとおり  
どりがスマホを通して別空  
間に生息している。よくよ  
く考えてみれば実に奇妙な  
空間だが、私たちは慣れつ  
つある。

ポケモンGOがもたらした  
風景は「人々の見えない  
つながり」を見えるようにし  
てしまった。しかし  
よくよく考えてみるとそ  
の不気味な風景は実は健全  
なものなのかもしれない。  
ポケモンが出現する店に入  
々は殺到するだろう。それ  
はネット上のつながりや  
人心の操作の「見える」化  
でもある。

巧みな戦略  
そのつながりごとを考えた

のはちようびインターネット  
空間と政治の関係が気にな  
っていたからでもある。  
最近出版された、野党時代の  
自民党の情報戦略「コンサ  
ルティング」に携わった小口  
日出彦氏の「情報参謀」（講  
談社現代新書）や、気鋭の  
社会学者西田亮介氏の「メ  
ディアと自民党」（角川新  
書）は、自民党がいかにか  
妙な情報戦略を仕掛けてい  
たかを描いている。

2013年参院選では、  
ネット選挙専門の「トウル  
ース・チーム」を立ち上げ、  
「あべぴよ」というスマ  
ホのゲームアプリを開発  
し、20万以上のダウンロード  
を達成する。全候補者に  
タブレットを配布し、新聞  
やテレビニュースだけでは  
なく、ツイッターや「おち  
やんね」などでネット上で  
の最新の言論動向も分析  
し、「演説ネタ」として使  
える「今日の世の中キー  
ワード」を毎日配信する。他  
党を圧倒する情報戦略、ネ  
ット戦略が構築されていた  
のである。

見えないつながりも実は  
高度に巧妙に構築されてい  
る。それはネットビジネス  
においても政治においても  
既に顕著だ。ポケモンGO  
のもたらした風景は一見不  
気味に見えるが、それはよ  
りいっそう不気味な「見え  
ないつながり」をあぶり出  
すものなのかもしれない。  
つながりを生かすのか、  
知らぬうちに操作され支配  
されるのか。今こそ鋭敏な  
感覚を持つべき時代。魂を  
奪われたソニビにならない  
ために。

（東京工業大教授）

## 美術作品への介入に危機感

美術作品を巡り、警察の介入や美術館  
側からの改変要請が相次いでいるとし  
て、国際美術評論家連盟日本支部が「美  
術と表現の自由」と題するシンポジウム  
を東京都内で開いた。パネリストからは  
近年の事例が報告され「後退戦を強い  
られている」と危惧する声も上がった。

上智大教授の林道郎は、女性漫画家  
うくでなし子に第三者に提供した女性の器  
の立体的データが「わいせつ」とされた刑  
事事件の事例を報告。作品が「芸術か、  
わいせつか」という論争について「芸術  
ならわいせつではない」という問題では  
ない。表現の自由はジャンルにかかわら  
ず確保されるべきものだ」と指摘。「ま

### 表現の自由巡りシンポ

ずは表現の機会を確保し、可能な限  
り公権力の介入を許さないことが大切  
だ」と強調した。  
東京都現代美術館を巡っては昨年、文  
部科学省への批判を含む会田誠と家族の  
共同作品を撤去するよう要請されたこと  
を会田がツイッターの投稿で公表し、美  
術界で大問題に。また、同美術館で今年  
開催されたグループ展「キセイ・セイキ」  
では、美術館側から複数の作家に対し  
ては、美術館側から複数の作家に対し  
ての改変要請があり、作家が同美術館  
での展示を断念したことが明らかになっ

### 「全てのジャンルで確保を」

### 「公立の組織構造に問題

ている。  
いずれのケースでも美術館側からの明  
確な説明はなく、事例報告をした油縄原  
立芸術大准教授の土屋誠一は「どのよう  
な意思決定プロセスがあったのかは知ら  
ないが、組織として機能不全を起してい

いるのではないかと同美術館  
元栃木県立美術館学芸課長の小  
「美術館の学芸員の身分が行政  
よりも圧倒的に低いので、現場  
通らない」として、公立美術館  
造に問題があると指摘した。



指田菜穂子「戌(いぬ)」(2015年)



指田菜穂子「申(さる)」(2015年)



見聞

福井



今回の五輪は美にブラジルらしい、リオデジャネイロらしい五輪だった。

開幕前は競技場など施設の建設の遅れがクローズアップされ、本当に問題なく開催できるのかと危ぶまれた。しかし現地の人たちは「ブラジルはそんなもんだよ」と慌てていなかったし、実際何とが間に合った。

選手村の水回りの不調を福原愛選手が自ら修理したり、多くの競技で観客席がガラガラだったり、マラソンコースに観客が乱入したり、さまざまな運営上の問題はあった。だが心配されたテロも起こらず、終わってみれば大成功だった。

### ■カーニバル

開会式からリオらしさが全開だった。各国選手団を先導するのは植木鉢や花で装飾されたカラフルな三輪自動車。こぎ手の満面の笑みもあいまって、それだけで祝祭気分を盛り上げた。選手たちはヌジラム中央の直線を進んだが、それは明らかにリオのカーニバルをイメージしていた。

カーニバルのパレードは、12のチームが2日に分かれて徹夜で行われる。各チームはテーマを設定し、数千人に及

# 発信すべきメッセージとは

ふ踊り手や打楽器隊が、精巧に作られた山車と共に、全長700mの直線を1時間以上かけて行進する。日本ではあまり知られていないが、テーマ、音楽性、踊り、衣装などの項目で厳密な採点を受ける「コンテスト」だ。最下位になれば下部リーグへ降格してしまう。

でも踊っている人たちは実に楽しそうだ。私たちがイメージする若い美形の「サンバダンサー」は一握りで、多くはテーマに応じたかぶり物や衣装をまとった群舞を担当し、高齢の人たちもたくさん参加する。五輪の開会式で行進で、誘導役として、矢印が描かれた服を着た人たちの、楽しみながらゆるい踊りはまさにその群舞を思い起こさせるものだった。

### ■人間の尊重

シビアな採点競技であつても高齢者も参加し、みんな楽しくサンバを踊るカーニバルのように、五輪という最大の国家行事であつても準備はギリギリになり、それでも大丈夫と樂觀し、多少のほころび

はいいじゃないかと許す。シエサイトを見てみると、大会ビジョンは「スポーツには世界と未来を変える力がある」であり、「全員が自己ベスト」であり、「多様性と調和」「未来への継承」が三つの基本コンセプトだ。しかしこれまで人間のあり方に、リオ五輪のメッセージを見たように思っ

### ■付け足し

さて4年後は東京五輪。私たち日本人は世界に向かって何を表現するのか。「震災からの復興」という招致時に強調されたテーマを覚えている人は少ないように見える。そ

エフサイトをみると、大会ビジョンは「スポーツには世界と未来を変える力がある」であり、「全員が自己ベスト」であり、「多様性と調和」「未来への継承」が三つの基本コンセプトだ。しかしこれまで人間のあり方に、リオ五輪のメッセージを見たように思っ

メントで日本人として何を表現すべきかを考えていた人もまた少なかっただろう。東京五輪は国立競技場問題で、そしてエンブレム問題で大揺れとなった。開催費用も大幅に膨らむ見通しで、私たちの意識は、テーマどころではなくなっているのかもしれない。このままでは開会式の演出も誰かがいつの間にか密かに決めて、私たちはテレビ中継を見て初めてテーマを知ることになってもおかしくない。イベントを行うことや建築物を建てるのが先に立ち、その後、スケジュールが決まり、テーマやメッセージは後から付け足しのようにしていく。それでいいのだろうか。



リオデジャネイロ五輪開会式で入場行進するブラジル選手団

リオの開会式では、東京を紹介するゲームブックが行われた。ゲームブックのリオに扮した安倍晋三首相は大うけだったが、その後の完璧に制御されたグラフィクスや直方体のフレームとのダンスは、日本の誇るべきテクノロジーの姿というよりは、その精緻なシステムに支配されている人間の苦悶のようにも見え、何か哀しきを感じさせた。

## 作家の宮本輝さん

作家の宮本輝さんが自らの父親と自分自身を題材にした長編小説「流転の海」は、第9部「長流の畔」(新潮社)が刊行され、完結まで1巻を残すのみとなった。69歳の宮本さんが、34歳から手掛けてきたライフワーク。「これだけ長い小説をずっと楽しみに読んでくれていた人がいる。いつか私も早く終わりたい」と原稿用紙に向かう日々だ。

「流転の海」の主人公は、宮本さんの父親をモデルにした明治生まれの松坂熊吾。粗野だがまただが、商才にだけ、ときに理知的。その熊吾が終戦直後、50歳で息子の伸仁を授かる場面から始まる物語だったが「34歳で50歳の男を書いたのは無理があった。精神的にも肉体的にも分からないことがあまりに多かった」。第1部を書き終えていったん作品から遠ざかり、第2部以降は時間をかけて、じっくり執筆を続けた。

「長流の畔」の舞台は1963年

## 長編小説「流転の海」最終章へ



「長流の畔」

## 人のために生きた父

していた父親をそのままという。』あるとき『ぼつ』と運が切れた。突然、何もかも運から見放されて、ちくはくになったと、しみじみ語る。戦前の熊吾は実業家として飛ぶ鳥を落とす勢いだっただが、戦後は事業



「極兵衛に書くもたてではないと思っただけに、じっくり構え書きました」と語る宮本輝さん(長野県群馬市)

の大阪。熊吾は60歳で、伸仁はようやく高校生になった。社長を務める中古車販売会社の運転資金を社員に横領され、熊吾は金策に奔走する。糖尿病にも悩まされ、さらには熊吾の不貞に端を発した妻房江の自殺未遂が追い打ちをかける。

熊吾の窮余の姿は、青年時代に接

を立ち上げては、手を広げすぎて失敗するということを繰り返す。運を息子に分け与え、自分一人、時代の流れからはじき出されてしまったようだ。

最終巻では父の死を熊吾に重ねて描く。「大將のおかげで今日がある」と、10年、20年たつてから手紙が来るのがあった。人のために生きた人。書いていて、あらためてそう思いました」

「流転の海」に向かう時には、普段あまり思いつかない父親との日々が頭に浮かぶ。小説なので事実をそのまま書くわけではなく、身内ゆえ、書くべきか否か、迷うことも多い。「死んでから、小説で付き合い合っている時間の方が長い。早く書き終えたいですよ。本当にあのおやじとはちよつと離れたい」と苦笑する。

第9部の題名は「野の音」とした。「あの最終巻でこの大団円に振りかぶるのも大団円といえるのかもしれない。これから流れてきたかたから流れていく。分らないようにどこかへ消えていく……。そんなふうに終えたい」。心静かに、ライフワークの総仕上げに向かっている。



# 憧れの喪失と教育の役割

大隅良典・東京工業大薬学教授がノーベル医学・生理学賞を受賞した。同じ大学に勤務する者として大変うれしく、また日本人研究者の3年連続受賞を心から喜びたい。

しかし記者会見で大隅薬学教授は、喜びの一方で近年の科学研究と支援の在り方に警鐘を鳴らした。「役に立つ」という言葉が社会をダメにしていくと思つたと語り、社会が将来を担うべき、長期的に科学をサポートする姿勢を持つてほしいと訴えた。

## ▽首都圏出身

ノーベル賞受賞をもたらした研究はどれも今から20年、30年も前のものだ。当時は大卒における基礎研究を支援する態勢があったが、今や「競争的資金」という名の下で「すぐに役に立つ」研究が優先される。その一方で大隅薬学教授は精力的に批判した。それは今、日本で基礎研究に携わる研究者の多くが感じていることである。3年連続でノーベル賞受賞者が誕生したからといって、現状を単純に喜べるものではない。

「私自身も別の切り口から大きな危機を抱いている。それはノーベル賞受賞者になぜか東京出身者が非常に少ないという事実である。」

## ノーベル賞の陰に

# 論考2016

上田 紀行

自然科学3賞の受賞者22人のうち、卒業大学としては東京大5人、東工大1人だが、全員が高校までの教育を地方で受けた方々だ。

利根川進氏だけが東京で教育を受けているが、中学2年からであり、進学先は京都大である。首都圏(東京、神奈川、埼玉、千葉)にまで範囲を広げても、神奈川2人、埼玉1人しかおらず、都道府県別人口比には見合っていない。つまり東京出身で東京の大学に行った人からはノーベル賞受賞者は出でず、首都圏出身者でも非常に少ないといっている。

## ▽「地域大学」

それを問題だと考へるのは、昨今の東京の大学入学者における首都圏出身者が劇的に増加しているからである。この30年間の推移をみると、東大は100000年

の47%から2016年は55%になった。東工大は69%から75%、早稲田大は52%から74%、慶応大は56%から73%とこの2大学も首都圏の地域大学「になりつつある。私自身東工大で教えるながら、この大学が首都圏の進学校出身者の大学になつていることをむしろと感じている。

こうした傾向は地方出身者が地元への進学を志向し軌を一にしている。大都市に子どもを送り出す経済的余裕がない家が増えていることや、私立の中高一貫校が首都圏に集中し、受験指導に関する大都市圏と地方の格差を拡大していることも背景にあるだろう。このように全国の大学が

## 息の長い視野を持つて

地域大学になり、地域ごとに自開したサイクルをめぐらして回すような状況になりつつある。これらは真に創造的な社会を築いてくれない。

## ▽創造性の源

それは「憧れの喪失」ともいえる。かつて地方から東京を目指す者たちは新天地への大きな憧れがあった。未知の世界がより広く自由な世界…。都会の実

際がどうかはともかく、少なくともこうした憧れが大移動を支え、その中には確実に「真理の探究」へ向かう大きな種が宿っていた。東京で生まれ育った人間には東京への憧れはない。カネとモノが集結する首都で育った若者たちはよりスマートにもつかぬ道を選択していくだろう。だが若者にとって境界を越える体験は、自らを懐し新たに再構築する、人生の創造性の源でもある。

海外に出る意欲が低下し、国内でも自分の地域から出ないというだけでは、社会を支える根源的な活力である個々人のインスピレーションが枯渇するだろう。

日本の教育にダイナミズムを取り戻さなければならぬ。未知のものへの自由への、真理の探究への憧れを取り戻さなければならぬ。そのためには生まれ育った地を離れて歩むという若者たちへの支援が必要だ。

基礎研究をおもひかたしては科学の発展はなく、社会の基礎となるべき教育をないがしろにしては私たちの未来はない。短期的な利得を求められず、真理への憧れを育む息の長い視野を持つこと。大隅薬学教授のメッセージは私たちの社会の根本そのものを深く問いかけている。

(東京工業大教授)

随時掲載 Note



ノーベル医学・生理学賞の受賞が決まり記者会見する大隅良典・東京工業大薬学教授  
—東京都目黒区の東京工業大

## 出版クライシス 激変する売り場

□5□

書物の点数や関連企業の集

中慶から「世界一の本の街」と称される東京・神田神保町を中心とするエリア。新刊書店や古書店、出版社、取次会社、製本、印刷会社が軒を連ねる本の一大拠点だ。だが、この街も変化を避けられない。作り手たちが街を離れ始めていたのだ。半面、書店の読み手が集まる観光地としての側面が強まっている。

「書店1毛の地」と呼ばれたこの地を選んだ創業者は、先見の明があったと頷く。「この語句は、六法全書で知られる出版社「有斐閣」社長の江草貞治(47)。創業はあ

格だ。

書店街としての歴史は案外、古くない。明治以降に学校ができ始め、専門書や安価な古書の需要が高まったことが契機となった。戦後は新たな知識を求め、本の発売を徹夜で待つ長蛇の列が現れるほど隆盛を誇った。

1984年創業の出版社「八木書店」も長年このエリアを支えてきた。多くの書店に本を取り次ぎ、貴重な古書を集め、出版社の過剰在庫を買い取り、削安で販売する。会長の八木壮一(78)は「全国的には書店数が減っているが、この古書店は今も増えている」と明かす。「古書店



新刊書店古書店が並び、観光客が行き交う東京・神田神保町

## 本の街の観光地化

の多様性が人々を引きつけ、一時はデジタル化で紙の本がなくなると言われたが、あの偉大な「一方、街の活気が失われた」と語る関係者もいる。業界紙

「出版ニュース」代表の清田なぐさ(78)は80年代までは「神田」と呼ばれる街を取次会社が集まり、書店街が毎朝、自販車やオートバイで本を買いにきていた。でも街の再開と捉えていた。

「出版のプロの街から、消費者の街に変わった」。有斐閣の江草社長が見る。悲観はしていない。街の新たな魅力と捉えている。







